
短編集(パラレル主体)

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集（パラレル主体）

【Nコード】

N9720S

【作者名】

界軌

【あらすじ】

思いついた端から投稿していく短編になります。別に投稿している小説のパラレルが主体となるので、そちらを真面目に読んで下さっている方にはあまりお勧めしません！というより、目の毒です。完全なお遊びです。……今気付きましたが、パラレルって既読じゃないと意味分らないですね。

カフェでのことゝお付き合いの進め方指南（失敗）（前書き）

注意！ 別に投稿している作品の平行になります。
がっかりすること請け合いなので、そちらを読んでいる方にはあまりお勧めしません。

カフェのことゝお付き合いの進め方指南（失敗）

とある日の、昼下がり。

とあるカフェのオープンテラスに目立つ青年が二人が座っていた。

一方は某大企業の跡取りである透。彼の前にはコーヒーカップが一つ置かれている。

向かい側には彼の幼馴染み、某会社社長の令息、海が座っている。彼の前にはコーヒーカップと、三種類のケーキが載ったプレートが一枚あった。

「だからさあ」

チョコレートケーキを突き刺したフォークをこちらに差し向けて話す友人、海を、透は胡乱げな目つきで見た。

「お前のやり方じゃ、ダメだっつってんだろ？」

「何が悪いと？」

目を細めて透が聞けば、海はケーキを口に突っ込んで「ふうん……」と腕を組む。

コーヒーを啜る透は、よもや何も考えずに話始めたんじゃないかと疑いのまなざしを送り始めた。

そこで海はようやく口の中のケーキを飲み込んで、すつと息を吸

った。

今度はアップルパイを突き刺したフォークを透に向ける。

「積極性だ！」

「……かなり積極的にやっているつもりだが？」

会えば、二人きりになれるように散歩に誘うことは欠かさない。
最近は手も繋げる様になった。

実際、目の前の幼馴染みさえ邪魔しなければもう少し距離は縮ま
っていただろう。

「お前なあ。一目惚れして、早半月だ。それで手を繋ぐ程度で満足
している気か??」

「……満足はしていない。する訳ないだろう……?」

「……………」

透が浮かべた笑みに、海は固まった。

この笑みをどう形容するのが適当か、言葉が出てこない。

だから彼は堅物の幼馴染みにこれだけを言う事にした。

ぼん、と透の肩に手を置く。

「お前も男だと初めて思い知ったよ」

「……………」

「っ……………!!!!」

透の肩に乗せた手に、無言で関節技が決められた。

振り返った手首の痛みに悶え苦しむ海は、切に願う。

頼むからこいつの地味ーに暴力的な側面を大人しくさせてくれ、
雛李！

カフェでのごお付き合いの進め方指南（失敗）（後書き）

読んで頂き有り難うございました。

本当に気分転換用に書いています。あは……。

カフェでのごく乙女の語らい（前書き）

注意！引き続き他の作品の平行になります。

そちらを読まれている方は、がっかりしたい場合のみお読みください。笑。

カフェでのごく乙女の語らい

とある日の、昼下がり。

とあるカフェの店内、奥まった席に少女が二人座っていた。

一方は進学の為に最近この街にやって来た雛李。彼女の前にはティーカップと半分に残ったタルトタタンが置かれている。

もう一方は雛李の親友の星奈。実は少女と呼ばれる年齢は過ぎているのだが、童顔のせいで雛李より僅かに上くらいにしか見えない。彼女の前にもティーカップとチョコレートケーキがあった。

「んんっ。このタルトタタンは絶品！」

雛李が幸せそうに言う。

目の前の星奈にも皿を寄せて勧めた。

「星奈も食べて食べて。すっごく美味しいから！」

「じゃあ、一口……」

自分のフォークで一口サイズに切り取って口に運ぶ。

「！……美味しい！」

「ね、ね！」

「カaramelソースがぱりぱりしてる。何、これはっ」

少し焦げた部分の香ばしさとしっかり煮込まれたリンゴの甘さはまさしく絶品と呼ぶに相応しい味だった。

しばし二人はその味に感じ入る様に黙っていた。

そこへ男性の店員が寄ってくる。

「水はいかがですか？」

聞かれた二人はちつとも水の減っていないコップを見て首を振った。

「いいえ、結構です。有り難うございます」

ほんわか笑って雛李は断る。

店員は残念そうに去っていった。

「……さつきからよく水を勧められるね。光の加減で減っているように見えるのかな？」

自分のコップを持ち上げてとぼけた事を言う親友に、星奈は呆れた溜め息をついた。

あの店員だけじゃない。この店にいる男性たちの多くはずっとこちらをちらちらと伺っているのだ。

まったくもう！ この娘は自分が他の人からどんな風に見えてい

るのか全然気にしないんだから。

それも仕方が無い、と星奈は思う。

何しろ雛李がいたところはとんだど田舎だそうで、彼女の容姿をもてはやす様な人間はいなかったらしい。

そのど田舎では頭の良い雛李は進学がままなら無い為、止むを得ずこの街まで出て来たのだ。

現在は遠縁である星奈の祖父のところに身を寄せて、勉強中。

息抜きに街に連れ出せばこの通り、男性陣の目を引きつけても気付きやしない。

ちなみに、彼らの視線は連れである星奈にも向いているが、本人は何も気付いていなかったりする。似た者同士の二人だった。

「それで、あの人たちとはまだ会っているの？」

「ん？ 透と海のこと？」

「そう」

雛李が嬉しそうに「友達が出来た」と星奈に報告して来たのは半月程前の事だ。

公園で散歩中に出会ったらしい。そしてその後も何度も会っていると。

雛李は度々紹介したいと言うが、医師の卵として務めている星奈は昼間に出掛ける事は中々出来ず、未だに彼らに会った事は無い。

「うん。明日は、会えるかな……。あ、でも。もうすぐ忙しくなるからあんまり会えなくなるかも知れないって言ってたの、よ、ね……」

話している間に、しょんぼりと雛李は肩を落とした。

折角出来た友人に会えなくなるのはさぞかし寂しいだろう。

けれど、やがて彼女は笑いながら顔を上げた。

「でも、明日なら星奈も一緒に行けるよね。紹介するね」

その幼げな笑顔に笑みを返して、星奈も口を開く。

「そうね。……そうだ、午前中にタルトタタンを作って持っていく？きつと義姉さんなら作れるわ」

「いい考えね！海は甘いもの大好きだけど、透は苦手だから、甘さ控えめにして。紅茶も持っていけばいいね」

すっかり寂しげな雰囲気を払拭して雛李は笑った。

彼女が笑うと胸の奥が暖かくなる。星奈も満面の笑みを浮かべた。

しかし、心の端っこには一抹の不安が残る。

……透と海って、どこかで聞いた事があるような気がするのよね。

……いえ、良くある名前だわ。うん。

カフェでのごく乙女の語らい（後書き）

読んで頂き有り難うございました。

三話で一つにしようと思い立ち、前話のサブタイトルを修正しました。

次でカフェの話は一段落のはずです。

その後書きで何の作品の平行か、とかの説明を載せようと思います。

カフェのこと、初対面の攻防？（前書き）

「カフェのこと」最終話になります。

カフェでのごく初対面の攻防？

とある日の、昼下がり。

大通りに面したカフェでお茶をしていた雛李と星奈は、「そろそろ帰ろうか」と腰をあげた。

会計を済ませて店を出る。

店の外に並べられたチェアやテーブルを見て、スウリはつつんと星奈の袖を引っ張って言った。

「ね、今度はオープンテラスで食べよう。晴れていたら気持ち良さそう」

楽しそうに言う彼女につられて笑みを浮かべた星奈は、そのオープンテラスの一席に目が行った。男が一人立ち上がったのだ。

むむ。背が高いわ……。

小柄な星奈にしてみれば、分けて欲しい程の長身だった。もう伸びないと思うと余計に欲しくなるものだ。

次の瞬間、こちらに向けられたやたら綺麗な顔立ちに目を見張った。

「あ」

隣であがった小さな声に気付かない程驚いていた。

三つのケーキを残さず平らげた海は、腕時計を見た。大企業の跡取り息子である透には、この後出席しなくてはいけない会議があるのだ。ボディーガード兼秘書的な仕事をしている海には彼のスケジュールを管理する義務がある。

だから、化け物でも見る様な目でこちらを見ている透に声を掛ける。

「おい。そろそろ時間だぞ。行こう」

「……ああ」

甘味嫌いの為、目の前でケーキを三個も完食されて多少気分の悪くなっていた透は頷いた。

だが、海の言い方はまるで透の意思でここに居たと言う様に聞こえたから、一応訂正しておく。

「そもそもお前が腹ごしらえだなんだと言うから入ったんだろうが……」

呆れた口調で言うも、幼馴染みが堪える様子は欠片も無い。

「えー。頭使うときは甘いものが重要だろ？エネルギーを補給しないともたないって」

「頭を使うのは俺であってお前ではない。低燃費の大食らいめ」

「あ、ひでー！秘書っぽいことだっしててるだろう？」

「ああ、この間は宗谷がお前に資料作成を丸投げされたとぼやいていたのを聞いたぞ」

冷静な一言に、海の顔が「やべっ」と歪む。

面倒な事は他に回す、それがやたら上手いのが彼だった。

するとそこで、透は店の中から出て来た人物に気がついた。と言うよりも、勝手に視線が引き寄せられた。

席を立って、自然に顔に微笑みが浮かぶの感じていた。幼馴染みの不審の眼差しなど目に入らない。

向こうも気がついて、「あ」と驚いた顔をした。けれどすぐに小さく首を傾げて笑い返して来た。

「透。海もいるのね」

彼女、雛李は、嬉しそうに言いながらデツキに上がってくる。

唐突に席を立ち、なおかつ優しく微笑んだ透を、ぽかんと見上げていた海はその声に振り返った。

「あれ、雛李？ 奇遇だね」

その後、「なるほどねえ」と続く。もちろん透が微笑んだ原因が

判明したからだ。

彼らのテーブルの脇に立った雛李は「こんにちは」と行儀良く挨拶した後、自分の後ろに着いて来ていた星奈を示して言った。

「彼女とお茶をしていたの。お店の奥でね」

海は立ち上がりもせず、星奈をしげしげ眺めると、ぱちんと指を鳴らした。

そのままその指を彼女に向けた。

「わかった、星奈だ。そうだろう？」

名前を言い当てられた星奈は「な、なんで……」と動揺する。

その問いに答えたのはようやく雛李から視線を外し、無表情に戻った透だった。

ただし、答える前に海の指を変な方向に曲げるのを忘れない。

「ぐえっ……?!」

奇妙な呻き声には、「人を指差すな」と注意することも忘れない。

それから高い位置から星奈を見下ろして、体温の低そうな声が言う。

「雛李が何度も話してくれた。ようやく会えたな」

差し出された手に、星奈は戸惑いながらも応じる。

隣では雛李がにこにこ笑っている。

「明日なら会えるわね、って話していたところだったの。まさか今日会えるなんて思わなかった」

「俺も、雛李が街に出てくるなんて思わなかったー」

まだ痛そうに指を擦りながら海が言った。

「星奈が誘ってくれたのよ。そうでないと、きっと迷子になっちゃうもの。慣れないところは、まだやっぱり不安だし」

その会話を聞きながら、星奈はどうにも気になっていることを聞く事にした。

透と軽く握った手は、丁重に、しかし早々に離されていた。

「あの、貴方は　コーポレーションの、……」

そこまで言っ、星奈は固まった。

こちらを見下ろす透の視線が凍てつく様に冷たかったからだ。

絶対零度の視線とはこの事かも知れない……。

テレビで良くみる大企業の後継者、透の顔はまさしくその人物とそっくりだったから、それを指摘しようと思っただけに。「これ以上何も話すな」と言う脅迫めいた眼差しに晒されている。

星奈は口を開いた数秒前の自分を罵りたくなった。

気まずい沈黙を破ったのは海だった。

「えっ、タルトタタンがあっただって?!」

かなり大きい声で叫んだのだ。

親友の置かれている状況に気がつかずに受け答えしているのは雛李だ。

「うん。中の黒板に土曜限定って書いてあったの」

「……ちなみに、美味しかった?」

「絶品!」

満面の笑みを浮かべた雛李を見て、それから海はおもむろに透を見た。

視線が言っている。「も、もう一個食っていききたいなあ」と。

透はそんな彼に、冷えた視線を送った。無言で「そろそろ時間だと言ったのはどのどいつだ」と責め立てる為のものだ。

「あ、でもね。明日作ろうかって、星奈と話していたの。だから、このお店には負けるだろうけど、明日、食べさせてあげられると思うわ」

あまりに分かり易く海が落ち込んでいたから、雛李は励まそうと明るく話しかけた。

みるみるうちに彼の表情は晴れて行く。

効果音がついたら、「ぱあああああ！」とでも言ったところか。

「さすが、雛李。ありがとう！」

がばりと両手を広げて雛李をぎゅっと抱き締めようとした。

ところが、ぎゅっとなったのは海的首だった。「ぐえっ」と呻いて、その手はすかっと空を切る。

視線を背後に向ければ、冷笑を浮かべた透がそこにいた。

右手が海の襟を握っている。しかも手首を返しているものだから、首が絞まる絞まる。

透から目を反らしたくて正面を見ると、不審の視線を送ってくる星奈が雛李の腕をがちり握って海から遠ざけていた。

そこで彼は手を打った。

「これが前門の子猫、後門の狼か！」

「誰が子猫ですか！」

麗らかな昼下がり、星奈の怒声が大通りに響いた。

翌日、タルトタンが焼かれるかどうか、海がそれを口に出来るかどうかは彼の誠意ある謝罪に掛かっていた。

カフェでのこと／初対面の攻防？（後書き）

読んで頂き有り難うございました。

三話構成なので、これが最終話になります。
見事にどうでもいい話ですね。

ご質問も頂いていたので、種明かしと言つか、解説を。

「カフェでのこと」の元の話は「民の望んだ皇妃」です。

テーマは、『出会った頃の彼らを現代日本に置き換えたら』です。
なので、登場人物は以下の通りになります。

雛李（すうり、と読みます） 主人公のスウリ。

透（普通にとおる） 皇帝ノールデイン。愛称がノールなので、
ノール、トール、透。無理がありますが、気にしないのが大切です。
海（かい、です） クウセルです。日本語の名前にできますか？

……できませんでした。

星奈（せいな、です） ウィシエルです。同上。

おまけ。

宗谷 アーノルド・セネガン。なんで宗谷になったのか、自分で
もわかりません。

本編での彼らの出会いがこんな風だったかどうかとは全く別の話
ですので、あまり深く考えず、界軌のお遊びとして受け取って下さ
い。笑。

登場人物たちの性格自体はあまり変えていないつもりですけど、海は物凄い甘味好きになってますね。おかしいな！。

今後も気の向くままに、投稿済み作品の登場人物たちをいじっていくつもりです。（ 題材にするのは「民の望んだ皇妃」に限らないです。）

お暇潰しにまた寄ってみて下さい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9720s/>

短編集(パラレル主体)

2011年5月23日08時34分発行